

# 学生主導型フィールド学習と支援プログラムの 導入にむけて

田中晃代, 保本正芳

## Student Support Programs and the Introduction to Fieldwork Techniques

Akiyo TANAKA and Masayoshi YASUMOTO

The aim of providing support in field study to new students is to ensure that they are capable of carrying out fieldwork. Workshops are organized, for example, on using the K-J method and on report writing. It is very important that students share the time of "awareness" and "turn around." Such support programs offer practical training and not just theoretical knowledge, and the students can make their decisions independently after participating in such programs.

### 1. はじめに

文系学部の講義形態は、一般的に座学教育が中心である。2010年度に設置された総合社会学部の環境系専攻は、統合化された学問を目指す環境学を視野に据え、環境と人間・社会との関係を総体的に眺め、文理融合型の解決アプローチを図れる人材を養成することを目的としている。受動的な教育だけでなく、学生自らが考え判断出来る能動型の学習が必要である<sup>1)</sup>。そこで、能動型学習の導入の一環として、学生の主体性・勉学意識を引き出すきっかけとなるフィールド学習(イベント)を実施した。

フィールドを捉えるとはどういうことなのかについて、篠原は「テーマに関わるさまざまな事柄を、フィールドの人々の中に入っていき、見て、聞き、記録し、考え、記述する一連の研究過程」と称している<sup>2)</sup>。フィールドにおける様々な事象から重要と思われる事象を抽出し、分析、考察するという一連の過程を経験してもらうことこそが、文理融合型解決アプローチを図れる人材を養成するものと考えられる。

今回実施した2回のイベントは、“まち”や環境についての見方・考え方を身につけること

を目的にしつつも、学生自らがイベントを企画・実行することにより、物事を調整する力を高めるという副次的効果も得られる。






本論では、本年度のイベント実施報告及び支援(ここでいう支援とは、学生の主体性を高めるための教員側の学生へのはたらきかけと定義する。)状況分析、今後のフィールド学習における学生支援プログラムの導入について検討する。

### 2. 環境系イベントの実施

#### 2.1 イベントの概要

教員がイベント実施を提案した後、学生実行委員(7名)が結成された。実行委員によるイベント内容を検討した結果、博物館見学と“まちあるき”を設定し、6月27日と11月28日に実施する事とした。環境系専攻には地球環境コースと都市・まちづくりコースが設置されており、地球環境コースを希望する学生に対しても満足が得られるよう博物館見学を“まちあるき”に付加したといえる。実行委員は、計画立案・イベント実施だけでなく、イベント終了後

表1 第1回イベント運営スケジュール

企画運営スケジュール	
6月4日 6月11日 6月17日 6月27日	<p>委員顔合わせ, 場所の検討 (実行委員会①) 場所の候補 (実行委員会②) ポスター・パンフレット作成, 名簿確定 (実行委員会③) しおり印刷 (実行委員会④)</p>  
6月28日	<p>環境系イベント当日</p>  
8月2日 ～ 8月5日	<p>「近江八幡まち歩きマップ」作成</p>  
8月21日	<p>オープンキャンパスにて「近江八幡まち歩きマップ」展示</p> 

も学部オープンキャンパスにて報告や報告書の作成を行う事となった。

第1回イベントにおける、実行委員による会議、イベント当日、オープンキャンパス用ポスター作成風景、作成ポスターをスケジュールと併せ、表1に示す。

## 2.2 第1回イベント

第1回は、2010年6月27日（琵琶湖博物館見学、近江八幡まちあるき）に実施した。参加者は、学生20名、教員7名であった。

琵琶湖博物館は、滋賀県草津市の琵琶湖畔にあり、「湖と人間」というテーマに沿って、琵琶湖とその他の湖沼についての自然・歴史・暮らしの理解を深める展示がされている。これらの見学から、「湖と人間」の共存関係、さらに地球規模での環境や生物多様性の保全について考えるきっかけとなることが選定理由である。当日は、移動中に教員から博物館の企画・展示について説明を行い、館内を閲覧した。

滋賀県近江八幡は、文化財保護法第144条の規定に基づき、国が選定した重要伝統的建造物群保存地区（以下、重伝建地区）である。戦国期に豊臣秀次により開かれた城下町で、江戸期には近江商人の在郷町として栄えた。また、関西を中心に数々の洋風建物を残す、建築家ウィリアム・メレル・ヴォーリズが近江八幡にも数多くの洋風建築を残している。現代においても、鉄道の駅が町から少し離れた位置に設けられたこともあり、近江八幡は和洋の貴重な建物が混在する古い町並を残している。“まち”の様子は、人間・環境・社会の繋がり（関係）を表したものである。各々の“まち”の感じ方（興味を持つところ）の違いを議論することが、「人間・環境・社会」を考えるきっかけとなる。イベント当日は3コースに分かれ、“まち”を散策した。街の人々との出会い・対話は、“まち”の理解を進めるイベント実施の重要な意義である。参加学生には、興味のある物、店、建造物等を撮影し、メモを取る事を課題とした。イベント終了後、参加学生からは「次回もぜひ参加したい」との意見があり、満足度の高

い評価が得られた。

## 2.3 第2回イベント

第2回は、2010年11月28日（人と自然の博物館見学、丹波篠山まちあるき）に実施した。参加者は、学生43名、教員9名であった。参加者は、前回と比べて大幅に増加した。前回イベントの参加者の満足度の高さが、参加者の広がりをみせた要因と考える。

兵庫県立「人と自然の博物館」は、兵庫県の多様な自然を紹介する「兵庫の自然誌」をはじめ、「人と自然」、「新しい文化」、「生物の世界」、「地球、生命と大地」の5つをテーマとして、人と自然とのかかわり、地球・生命の営み等を紹介している。

兵庫県丹波篠山は、江戸時代に篠山城が築かれた事に伴った城下町で、近江八幡と同様に重伝建地区である。6月と11月の両イベントに参加した学生からは、「同じ重伝建地区であっても、“まち”の違いを感じる事が“まちづくり”に役立つと思った。」と感想があり、イベントを2回実施したことに意義があった。図1に第2回環境系イベントの様子を示す。

## 3. 学生支援プログラムの導入

### 3.1 イベント開催前の学生支援

表1、2に示すように、第1回および第2回のイベント実行委員会のスケジュールをみると、回数および打ち合わせ内容が明らかに異なっていることがわかる。

回数については、第1回の実行委員会は4回程度の実施であるが、第2回の実行委員会は9回の実施と倍以上の回数となっている。打ち合わせ内容については、第1回は「場所の候補」や「ポスターやチラシの制作」などの作業にとどまっているが、第2回は「場所の候補」のみならず、「まちあるきコースの検討」や「班分け」、「班ごとのリーダーの確定」、「当日の役割分担」等多様化している。

第1回のイベント実行委員会を構成する学生は入学後2ヵ月しか経過しておらず、企画運営



(a) 人と自然の博物館



(b) 丹波篠山での様子

図1 第2回環境系イベントの様子

表2 第2回イベントスケジュール及び分担

実施日 月/日	内容	役割	
		教員	学生
10/1	場所の候補 (実①)		●
10/8	場所の候補 (実②)		●
10/15	場所確定, チラシ作成 (実③)		●
10/22	コース, 施設検討 (実④)		●
10/23	オープンキャンパス打ち上げ	○	●
10/29	バスレク内容検討 (実⑤)		●
11/4	行事許可願提出	●	—
11/5	チラシ作成 (実⑥)		●
11/12	チラシ配付, 班分け (実⑦)	●	●
11/19	名簿確定, しおり作成 (実⑧)	●	●
11/26	実行委員役割確定 (実⑨)	○	●
11/28	イベント当日運営		●
11/29	行事報告書提出	●	—
12/3	企画運営課題の整理		●
12/10	企画運営課題の整理 (KJ法)	○	●
12/17	報告書作成のイメージ共有	●	●
12/24	報告書作成のイメージ共有		●

●: 内容について, おもにその役割を担った主体,  
○: 運営のためのチェックリスト作成づくりや,  
KJ法をやってみてはどうかと促す助言。(実): 実行委員会の開催。

の多くが教員によって実現化された。例えば、「場所の候補」であるが、事前に環境系専攻会議での教員間の話し合いをもとに場所の候補をリストアップしたのち、実行委員会で諮るなどの過程を経た。教員間の話し合いでは、「地球環境に興味を持つ学生」、「都市・まちづくりに興味をもつ学生」が共に満足のいくイベントであることを第一義の目的とすることが共有された。

しかし、第2回の実行委員会では、第1回のイベントの「場所の候補」を参考にしながら、「歴史的な町並み散策」と「自然をテーマにした博物館」が学生側から提案された。

### 3.2 イベント開催後の学生支援

第1回、第2回のイベント実施における支援の特徴は、イベント終了後に「オープンキャンパス」で学生達に「発表の場」を設けることや、「KJ法を活用した目的意識の共有化」や「作業の場」を用意するなど、学生達に「気づき」や「振り返り」の時間を共有してもらうことにあった。

例えば、第1回イベント終了後では、オープンキャンパスに展示するための「近江八幡まち歩きマップ」を作成した。第2回イベント終了後では、ある学生から「イベント運営の反省が必要」という声があがったため、KJ法を使っ

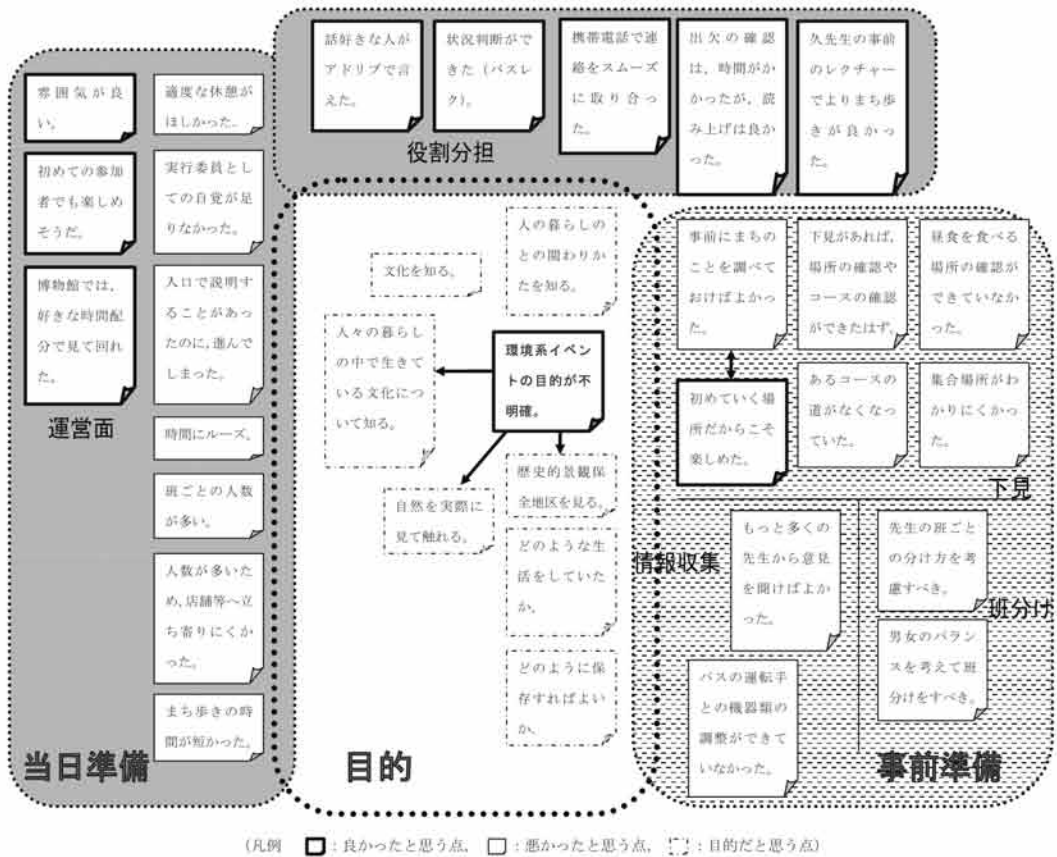


図2 KJ法によるイベントの反省点

た実行委員同士の目的の共有化が図られた。図2に、KJ法による詳細なイベント反省点を示す。

図2は大きく「当日準備に関する意見」と「事前準備に関する意見」に分類されているが、その中心部には「目的」が明記されている。「歴史的景観保全」と「自然とのかかわり」という第1回から引き継がれてきたイベントのキーワードに加えて、新たに「人びとの暮らし・文化」というキーワードが学生間で共有化されたことがわかる。

当初、教員間で話し合われていた「地球環境に興味を持つ学生」「都市・まちづくりに興味をもつ学生」が共に満足のいくイベントであることを目的とした内容であるという理由で、

「歴史的景観保全」や「自然」が提案されたが、そのほかにも、この両者のテーマをつなぐ新たな目的としての「文化」が学生間で認識されたものとする。

学生に、こうした「気づき」や「振り返り」の機会を持ってもらうことによって、新たな目的の共有化が促され、次の段階へとステップアップが見込まれたものと考えられる<sup>3)</sup>。

#### 4. おわりに

イベント実行委員の学生は、ポスターやパンフレットの作成だけでなく当日のスケジュールや移動のバスの中でのレクリエーションのプログラム等も考え、イベント終了後のオープン



キャンパスでの発表にまで至った。各々が自然に役割を担っており、一部とは言え、学生の主体性を引き出す目標は達成している。現在は、イベント報告書の作成、来年度のオープンキャンパスの報告に向けての検討などが、学生主体で行われている。

2年時必修科目である「演習B」には、実際に“まち”を歩き、建物や“まち”という空間からデータを抽出・分析する実習が含まれる。イベントは、演習の受講前授業とも位置づけられ、イベントと演習を経験した2年生主導となる来年度のイベントは、今年度よりも充実したイベントになると期待している。

最後に環境系専攻の1年生（2010年度：月

城静，玉中健太，矢野修平，塩見拓也，花立智司，小川翔平，青山昌也，西尾圭祐，小田島史弥）の各氏の協力貢献と、総合社会学部事務局による支援に深い感謝の意を表します。

**参考文献：**

- 1) 小川潔：「都市の中で環境学習を考える」（1994），都市問題，第85巻第5号，pp.3-13
- 2) 篠原清夫・清水強志・榎本環・大矢根淳編「社会調査の基礎 社会調査士A・B・C・D科目対応」（2010），弘文堂，pp.70-73
- 3) 山内祐平，ほか：「学びの空間が大学を変える」（2010），ポイックス株式会社，pp.46-50